

願いをもって対象と関わり，気づきを広げ深めながら，くらしを豊かにする
生活科学習

1 生活科における子どもに備えさせたい資質・能力

本学校園の生活科で目指す姿

- 身近なひと・もの・ことに直接はたらきかける姿
- 対象に対してのこだわりをもって没頭する姿
- 経験したことや考えたことを自ら表現できる姿
- 対象に対する気づきを広げ深めながら，くらしを豊かにしていく姿



生活科部で身につけさせたい資質・能力

- ・ 願いをもって自ら対象に直接働きかけようとする意欲
- ・ 疑問をもって考えたり，試したり確かめたり，工夫したりする力
- ・ 自分なりの表現で表したり，言葉で伝えたりする力

低学年の子どもは，どのような学習や活動にも体全体を使って意欲的に取り組む。できるかどうかわからないという不安がないわけではないが，「やってみたい」「〇〇してみたい」という願いをもっている。そして，身近なひと・もの・ことに体全体で直接関わりたいと思う存在である。

「もっと〇〇してみたい」「〇〇さんみたいに～できたらいいな」「～できるようにするには，どうしたらいいかな」という思いや願いをもっているということは，子ども自身が追求していく方向が見えているということである。このように，追求する方向が子ども自身に見えるようになっていることは，追求がより連続し，子どもたちが安心して追求できる支えとなると考える。このような願いをもって，ひと・もの・ことに主体的に関わろうとする姿を生活科の学びの中で育てたい。

子どもは，対象に対して「やってみたい」「調べてみたい」「こんなふうにやってみたらどうだろう」という思いや願いをもとに，こだわりをもって対象に主体的に関わろうとする。思いや願いをもって対象に関わっていくなかで子どもは，「どうして〇〇なんだろう」「どうしたらもっとよくなるだろうか」と疑問をもったり，「〇〇したら，よく動くようになるかもしれないな」「こんなことを聞いてみようかな」と考えたりする。そして，他者との関わりを通して「〇〇さんはこうだけど，ぼくのは〇〇だ」「〇〇さんのやり方は，いいな」と比較したり，「こうしてみると，どうかな」と試行錯誤を繰り返したりする。そして，「やっぱりこうした方がいいかもしれないな」と判断し実行することで「やっぱりそうだった」と確かめる。そうすることで，生活に必要な技能や思考を身につけていく。このように様々な体験や活動のなかで成功と失敗を繰り返しながら思考と体験が繰り返される。

そして，伝え合う場で子どもがもっている気づきを言葉や身振り等で表現することで，

一人一人の気付きが明確化・共有化され、気付きが広がり深まっていく。その広がり深まった気付きをもちながら活動しながらさらに思考・判断し、単元を通して気付きの質が高まっていく。このように気付きの質が高まるような学びの繰り返しによって、子どもたちのくらしが豊かになっていくと考える。

2 資質・能力を育むために

① 願いをかなえようとする問いが生まれる対象との出会わせ方を工夫する

子どもが学習対象に対して自ら願いをもつような、またその願いをかなえたいくなるような問いが生まれる対象を選ぶこと、また、選んだ対象とどう出会わせるかを教師は考えなければならない。対象と出会った時、どんな気付きの芽生えをもつかがその後の追求が連続するような問いをもつことに大きく関わってくる。そこで、子どもが日々のくらしの中で何に目を向け、どんなことに心を動かしているのか、くらしや生活経験、思いや願いなどを探るため、子どもと深く関わり、子どものくらしを掘り起こすことを大切にしていこう。このようにすることで、子どもは対象に興味・関心をもち、主体的に関わろうとするのではないかと考える。

② 一人一人の追求を支える対話

ここで示している対話とは、日々の何気ない子どもとの会話であったり、授業の中でのふりかえりカードであったり、子どもたちが毎日書く日記であったりする。それらを通して、子どもが何に対して、どんなことを考えているのか、どんな思いや願いをもっているのかを知る。このように、日々刻々と変化する子どもの気持ちのとらえを大切にしていこう。そして、そこでとらえた思いや願いを実現していくためには、どのようなはたらきかけを行えばよいのかを考える。こうすることによって、子どもが疑問をもち考えたり確かめたり、工夫したりするときの支えを行うことができ、子どもの追求意欲がより高まり、気付きが広がり深まっていく。

③ 気付きが広がり深まるための学び合いの設定を工夫する

子どもの気付きや問いを、学級全体で共有化したり明確化したりする学び合いを単元の中に設定する。学び合いは、「めあてづくり」「気付きを交流する場づくり」「ふりかえり」と、そのねらいを明確にして設定し、単元を通して気付きの質が高まっていくようにコーディネートする。まず、気付きの芽生えや初めの問いをとらえ、学級全体で共有化したり明確化したりすることで単元を貫くめあて（追求の方向が見えるための問い）を子どもとともにつくっていく「めあてづくり」を行う。次に、「友だちに教えてあげたい」「友だちがどんなことをしているのか知りたい」という思いの高まりに合わせて設定する「気付きの広がりや深まり」をねらう学び合いを行う。そして、1時間毎や単元終末に、自分の学びを子ども自らが自覚し、さらなる願いや新たな問いをもつことをねらう「ふりかえり」の学び合いを行う。

学び合いの際の表現方法は、実際にその場でやって見せたり、実物をもって説明したりするなど、子どもの願いに寄り添って行うようにする。子どものこだわりをもった追求や気付きが広がり深まるような学び合いを有効に機能させることで、子どもたちのくらしを豊かにしていく力が養われるようにしたい。

(文責 大坂 慎也)